

優秀賞 埼玉県 田中 千恵 様 (60代 女性)

若い時には何も考えていなかった年金。その重要さに気付かされたのは親の介護がキツカケだった。私が22歳になったばかりの頃、63歳の父が倒れた。脳血栓であった。半身不随になりつつも意識ははっきりしており、自営だった事もあり仕事の段取りなど寝たきりではあったがベッドから指示を出していた。未だ年齢的に若かったので、手術して回復するものだと思っていたが結局、場所が悪くて手術も叶わずその後11年間を寝たきりの状態で過ごした。一家の大黒柱の不在で収入は激減した。先行きの見えない中で入院費など多くの負担を強いられたが、幸いにも年金を受取れる年齢に達していた事が唯一の救いであったと母が話してくれた。最終的には当時まだ数少なかった特別養護老人ホームに入所し最期を迎えた。父が受取り自分の老後のために楽しみであったであろう年金は結局、父の入院などに宛がわれてしまった事が今、振り返った時に申し訳ない思いに駆られる。

父を見送った時の私は3歳の娘を持つシングルマザーとしてパートに勤しんでいた。

お金は無かったが人には恵まれていたので、パート先でも良くして頂いた。そんな時、娘が小学校に上がる頃、パート仲間に「厚生年金と社会保険完備の会社に勤めた方が良いよ。この先の事を考えたらパートではなく正社員で働かないと、お金がかかるから大変よ」と促され一念発起して今の会社にお世話になり25年が経った。還暦を過ぎた今でも働かせて頂いている。本当に有難い事だと感謝の思いで一杯である。

母も私が幼い頃から仕事をしていて70歳過ぎまで働き続けた。リタイアしたあと、私達と一緒に暮らし、扶養家族に出来ない程の年金を受取り、家事をこなし孫の面倒も見てくれた。一緒にいてくれて有難う。

母には感謝の一言である。一緒に暮らしている中、喧嘩をしたり、揉めたりもしたが、傍らにいてくれた事は有難かった。母は年金を私たち母娘の為にも惜しまず偶数月には家に入れてくれた。母の為だけに使って欲しかったが現実は厳しく、年金に依って支えられていたと今、振り返っても感謝の思いである。

しかし、そんな母も老いには勝てず認知症になり、最期の3年半は病院での生活となった。

母の入院費もまた、父と同様、年金に助けられた。要介護の申請は通ったものの毎月支払う額は、私一人の収入ではどうにもならない。母には申し訳ないと思いながらも年金で一部補填させて貰った。

ここでも、年金に感謝の思いが募る。有難いと本当に思った。

そして、92歳まで頑張ってくれた母を見送る頃には、自分の還暦が少し見え始めていた。

父を介護し平成元年に見送り、母と同居し、母に助けられ楽しく暮らし、母を介護し平成22年に見送り、私の娘としての役割は終わったと実感した。そして平成28年、自分が還暦を迎えた。還暦を機に年金事務所に相談に伺い、申請書を提出した。年金事務所の方が本当に優しく接して下さり懇切丁寧に教えて頂きながら、勤務先の協力もあり、何とか全ての書類を揃え申請が終了。毎月のお給料の他に、年金をいただける事に今は感謝の思いで一杯です。18歳から働いていない時期がない程、仕事と介護と子育てだけで過ごして来た人生だったが、介護・子育ての全てから開放され、60歳になってやっと、自分だけの時間を過ごせる様になった。友人と過ごしたり、昔の仲間と会ったりして、充実した日々をおくる事が出来る様になった。これからは、娘の幸せを祈りつつ、母が私にしてくれた数々の優しさを今度は娘に少しでも、お裾分けして行かれる老後を過ごして行きたいと思います。

年金…若気の至りで昔は自分には無縁のモノだと思っていましたが、年齢を重ねるにつれ、その重要さが身に沁みています。